

對源氏物語新釋

卷十二
去次義則

310
138

310-138
|| X

外箱あり



始



對源氏物語新釋

卷十二

310

138

27.9.30

對



原

氏物語新釋

吉内義則著



310
138

内本も... 凡例

本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所蔵の河内本を以て嚴密に對校して本文を立した。
總讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。
一 底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩様に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の御をぞくせまでも忠實に傳へる事に力めた。
一 對校の配號と比しては黒點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黒點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。 附註本に於て
例へば、

凡例



尾張徳川家所蔵



第十二卷所收目次

御法	一
幻	二五
雲隠	五一
匂宮	五三

一 蓮の王様... 紅の其梅... 竹... 匂宮... 五三

みづ

一 蓮の王様... 紅の其梅... 竹... 匂宮... 五三

書の上いたう煩ひ 若菜巻下七
四頁にあつた。

頼もしげなく、後世の世がな
く、すく、頼むが加はるので。

書しにても、源氏は書上に一日
でも死におくれば、事大に思
ひ、事思つてゐられるが、
みづからの御心遣、頼上自身は
現世に於て何一つ不足に思ふ事
なく、又氣に懸る子供もない事だ
から。

年頃の御契り、源氏との長年の
夫婦縁が絶えて、源氏に歎きを
かける事だけが、心中人知れぬ
悲しきであつた。

多くせさせ給ひつつ、河内本は
本の傍。

いかでなほ本意ある、ぞひ天張
り、意の通りに尼になつて暫く
でも命のある間は一心に念佛三
昧に暮したい。

御法

紫の上いたう煩ひ給ひし御心地ののち、いとあつしくなり給ひ
て、とりたててせうがせうといふ事なくそとほかどなく、憎みわたり給ふこと久しくなりぬ。大判といふいとあ
どろい、ではないがしうはあらねど、年月かさなれば、頼もしげなく、い
とどおえがになりまさり給へるを、院の思ほし敷くこと限りな
し。暫しはてもおくれ聞え給はむことをば、いみじがるべくお
ほし。まじみづがらの御心地には、この世に他か取事なく、う
しろめたきほだしたにまじらぬ御身なれば、おながちにかげと
どめまほしき御命ともおぼされぬを、年頃の御契りかけ離れ、
思ひ歎かせ奉らむことのみぞ、人知れぬ御心のうちにも、物あ
はれにおぼされける。後の世のためにと、尊き事どもを多くせ
させ給ひつつ、頼上いかでなほ本意あるさまになりて、暫しもか
づらはむ命の程は、百聞されなくて全事な行ひをまされなく、とと、一此五字なしたゆみなくおほ
し宜へど、源氏は更に許し聞え給はず。さるはわが御心ににも、しか
おぼしそめたる筋なれば、かく懸に思ひ給へるついでに催され

たか

舞殿の西の塗籠 舞殿の西の塗籠... 舞殿の西の塗籠... 舞殿の西の塗籠...

舞殿の西の塗籠 舞殿の西の塗籠... 舞殿の西の塗籠... 舞殿の西の塗籠...

舞殿の西の塗籠 舞殿の西の塗籠... 舞殿の西の塗籠... 舞殿の西の塗籠...

南ひんがしの戸をあけてはします。舞殿の西の塗籠... 北の廂に、方々の御局どもは、障子ばかりを隔てつしたり。

より見え、たる花のいろく、なほ春に心とまりぬべく匂ひわたりて、百千鳥の囀るも、笛の音に劣らぬ心地して、物のあはれも面白さも残らぬ程に、「陵王」の舞ひて、急になる程の末つ方の樂、花やかに賑はしく聞ゆるに、皆人のぬきかけたる物のいろくなども、物の折からに、をかしうのみ見ゆ。みこたち上達部のなかにも、物の上手ども、手残さず遊び給ふ。上下心地よげに、興ある気色どもなるを見給ふにも、残りすくなしと身を思し、なる御心のうちには、よろづの事あはれに覺え給ふ。

昨日例ならず起きる。舞殿の西の塗籠... 昨日例ならず起きる。舞殿の西の塗籠... 昨日例ならず起きる。舞殿の西の塗籠...

なまじりどましき 表面立たない
がに親しみあつて居つた花散里
が明石上なども、誰一人として
永久に生きたるべき世ではない
方知らずこの世を去つてゆく
事を思ひ續けるを、非常に悲しく

絶えぬべきやがて死ぬべき我
身ではありませんが、あなたには
永く思つておきます。あなたには
よく思つておきます。生々力つた
あなたの中ですもの。「を」は
あなたとの「み」をその初音
味よつて身に代用したもの
結ぶおの歌、あなたとの御約
束はいつまでも無くせぬと
ではあります。無沙抄云々
石土は思惟をして、僕の人め
しありのまゝ、是は花ちるさとの
性也
御法にさへ「さへ」は病氣の爲
に氣絶なされるのはもとより身さ
の氣にも氣絶なされたの意

いかにおはしまさむと 衆上が
どうおなり遊ばすのだらうと思
つて見ても、まづ心は眞暗にな
る
東の對に 中宮が東對に御滞在
になる善なので、衆上も御苦惱
はあつてもお待受の御用意をな
さる
この世の有様を 衆上の御孫分
なる皇子達の御生長の先の長い
事を見
名對面 行啓に供奉の公卿達の
名のりする事である。河海抄、后
宮行啓儀、北山抄、六府大將以
下一員近衛等供奉、(裝束同三行
幸) 此外宮司兼中少將者三行
箭一供奉、入御之後、王親名對
面、宮司問之
今宵は集離れたる 中宮が居ら
れるので源氏は衆上のそばに寄
れないから斯くいはれたのであ
る
無徳なりや つまらない。
まかり休み 自分の部屋に歸つ
て寝よう

は、さしも目とまるまじき。人の顔どもも、あはれに見渡さ
れ給ふ。まして夏冬の、時につけたる遊びたはぶれにも、なま
じりどましき下の心は、おのづから立ちまじりもすれめど、さす
がになさけをかはし給ふ方々は、誰も久しくとまるべき世には
あらざんなれど、まづわれ一人ゆくへ。知らずなりなむ。
をおぼし續くる、いみじうあはれなり。
事果てて、おのがじし歸り給ひなむとする。も、遠き別れめさ
て惜しまる。花散里の御方に、
絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを
御返り、
結ぶおの契りは絶えじ大方の残りすくなきみのりなりとも
やがてこのついでに、不斷の・讀經、讀法などたゆみなく、尊
き事どもをせさせ給ふ。御修法は殊なるしるしも見えて程經ぬ
れば、例の事になりて、うちはへさるべき所々寺々にてぞせさ

せ給ひける。
夏になりては、例の暑さにさへ、いとど消え入り給ひぬべき折
折多かり。その事とどろくしからぬ御心地なれど、
・・・只いと弱きさまになり給へば、むづかしげに所せく
惱み給ふこともなし。さぶらふ人々も、いかにおはしまさむと
するにかと思ひ寄るにも、まづかさくらし、あたらしう悲しき
御有様と見奉る。斯くのみおはすれば、中宮この院にまかです
せ給ふ。東の對におはしますべければ、此方にはた待ち聞え給
ふ。儀式など、例に變らねど、この世の有様を見果てずなりぬ
るなどのみ思せば、よろづにつけて物あはれなり。名對面。
を聞き給ふにも、その人かの人など、耳とどめて聞かれ給ふ。
上達部などいと多く仕うまつり給へり。久しき。御對面の
とだえを珍らしくおぼして、御物語こまやかに聞え給ふ。院入
り給ひて、今宵は集離れたる心地して、無徳なりや。まかり

秋風に暫しとまらぬ露の世を誰か草葉のうへとのみ見ひ
と聞えかばし給ふ。御かたちども、あらまほしく、見るかひあ
るにつけても、斯くて千年を過ぐすわきもがなと思さるれど、

心にかなほぬ事をれば、かけとめむ方なきを悲しかりける。今
は渡らせ給ひね。亂り心地いと苦しくなり侍りぬ。いふかひな
くなり、にける程といひながら、いとなめげに侍りや」とて、

御几帳引寄せて臥し給へる。さまの、常よりいと頼もし
けなく見え給へば、「いかにおぼたるにか」とて、宮は御手を
とらへ奉り、泣く泣く見奉り給ふに、誠に消えゆく露の

心地して、限りに見え給へば、御誦經の使ども、數も知らず立
ち腹ぎ、たり。さきんも斯くて生き出で給ふ折になら
ひ給ひて、御物怪、と疑ひ給ひて、一夜さまく
の事をし盡させ給へど、かひもなく、明け果つる程に消え果て

給ひぬ。宮も、歸り給はて斯くて見奉り給へるを、限り
なくおぼす。誰もく、ことわりの別れにてたぐひある事とも
おぼされず、珍らかにいみじく、明けぐれの夢に感ひ給ふほど、
更なりや。さかしき人、おはせざりけり。さぶらふ女房な
ども、ある限り、更に物覚えたるなし。院はましておぼしづ
めむ方なければ、大將の君近く参り給へるを、御几帳のもとに
呼び寄せ奉り給ひて、馬斯く今は限りのさまなめるを、年頃の
本意ありて思へること、斯かるきさまに、その思ひた
がへてやみなむがいといとほしきを、御加持にさぶらふ大徳た
ち、讀經の僧なども、皆聲やめて出でなめるを、さりとも、
立ちとまりて物すべきもあらむ。この世には空しき心地するを、
佛の御しるし、今はかの暗き道のとぶらひにだに頼み申すべき
を、頭おろすべしよし物し給へ。さるべき僧誰かとまりたる」
など宜ふ御氣色、心強くおぼしなすへかめれど、御顔の色もあ

斯くて見奉り 禁上の露のさ
まを。
ことわりの別れにて 生者必滅
は當然の理で、他にも例のある
事などと驚める事も出来ず、
類のない事のやうに悲しく、
さかしき人 氣のたしかな人は
一人もおいでにならなかつた。

年頃の本章 禁上は年来出家を
希望してゐられたから、かうし
た臨終の際に、その望みを遂げ
させずにしまふのも氣の毒故。

この世には空しき 佛の御利益
は現世ではかひもなかつたやう
だから、今はせめて冥途の甲ひ
にでもお頼りしたいと思ふ故、
判要の事を、計らつて下さい。

給ひぬ。宮も、歸り給はて斯くて見奉り給へるを、限り
なくおぼす。誰もく、ことわりの別れにてたぐひある事とも
おぼされず、珍らかにいみじく、明けぐれの夢に感ひ給ふほど、
更なりや。さかしき人、おはせざりけり。さぶらふ女房な
ども、ある限り、更に物覚えたるなし。院はましておぼしづ
めむ方なければ、大將の君近く参り給へるを、御几帳のもとに
呼び寄せ奉り給ひて、馬斯く今は限りのさまなめるを、年頃の
本意ありて思へること、斯かるきさまに、その思ひた
がへてやみなむがいといとほしきを、御加持にさぶらふ大徳た
ち、讀經の僧なども、皆聲やめて出でなめるを、さりとも、
立ちとまりて物すべきもあらむ。この世には空しき心地するを、
佛の御しるし、今はかの暗き道のとぶらひにだに頼み申すべき
を、頭おろすべしよし物し給へ。さるべき僧誰かとまりたる」
など宜ふ御氣色、心強くおぼしなすへかめれど、御顔の色もあ

御物怪などの物怪などが人の心を苦しめようとして、かうした事がありがちなものでございませぬから、これもそれなにかも知れませぬ。

一日一夜にても、願無量壽經 一若衆生、若一日一夜、受持八戒齋、若一日一夜、持沙彌戒、若一日一夜、持具足戒、(中略) 如此行者、命終時、見阿彌陀佛、與諸眷屬、放金色光、持蓮花、寶蓋、至行者前云々

おほげなき心、願無量壽經 願を懸けるといふやうな大それた心。

しづめがほにて、夕暮が女房達を伺するのにかとつて、御几帳の垂布を引上げて御覽になる。

この君の、源氏は夕暮がかうして覗き込んであるのを見つづつて、うであつた。

新く何事も、かうしてまだ生前と少しも變つた様子もないのに、死んだ事の明白なのが感じない。

なかく、見なければさうなかつたのに、見た爲に却つて、御髪の只うちやられ、髷も少しもある髪の方々と髷もななく、少しもつれてゐる様子もなく。

らぬさまに、いみじく堪へかね、御涙のとまらぬを、ことわりには悲しく見奉り給ふ。御物怪などの、これも、人の御心亂らむとて、かくのみ物は侍るを、さもやおはしますらむ。さらば、御心 てもかくても、御本意のことはよろしき事には、べゝるなり。一日一夜にても、願無量壽經 忘むことのしるしこそは空しからず侍るなれど、誠にいふかひなくなり、果てさせ給ひて、のちの御髪はかりをやつさせ給ひても、殊なるかの世の御光ともならせ給はさらむものから、目の前の悲しびのみまざるやうにて、いかか侍るへか「らむ」と申し給ひて、御忌に籠りさぶらふべき志ありてまかてぬ僧、その人かの人など召して、さるべき事ども、この君ぞ行ひ給ふ。

年頃何やかやとほげなき心はなかりしかど、いかならむ世に、ありしばかりも見奉らむ、ほのかにも御聲をだに聞かぬ事など、心にも離れず思ひわたりつるものを、聲は遂に聞かせ給はずな

りぬるにこそはあめれ、空しき御儀にても、今一度見奉らむの 志かなよべき折は、貞今よりほかにいかでかあらむ、中と思ふに、 つつみもおぼす泣かれて、女房のある限り騒ぎ感ふを、あな かま、暫しとしづめがほにて、御几帳の帷子を、物のたまふ紛れに引きあげて見給へば、涙の と明けゆく光も、覺凍な れば、大殿油 近いかかげて見奉り給ふに、飽かずうつくしげに、 めでたう清らに見ゆる御顔のあたらしさに、この君の斯くのぞ き給ふを見る、あながちに隠さむの御心もおぼされぬな めり。馬斯く何事もまだ、變らぬ氣色ながら、 限りのさまはしるかりはるさそ、御袖を顔にあしあて給へる程、 大將の君も涙はぐれて、目も見え給はぬを、 強ひてしほりあげて見奉るに、なかく、飽かず悲しき事たぐひなきに、 誠に心感ぬもしぬべし。御髪の只うちやられ給へる程、こちなくさよらにて、 露ばかり亂れたる氣色もなう、つや、 とうつくしげなるさま

とかくうち紛らはず 何かと化
粧し取替つてみられた生前の
姿よりも全く異なるお姿は
心に残してゐられるお姿は
形がなれないよの今更にい
形がなれないよの今更にい

死に入るとは 夕陽は見とれて
分るが、その後の御姿は
あれは無様な顔ひだ
何事もおぼしつかれず
くれて分別もつかねる
を強ひて得着けて

古へも悲しと 夕陽や英上など
いとかうお立ちては
で立ち入つたので、
だなかつたので、
前後例のない事のやうに感じら

山けよりだに立て
限りありける 御送には一定の
限りありける 御送には一定の
限りありける 御送には一定の
限りありける 御送には一定の

例の事なれど、茶思一片の煙と
なつて立ちのぼつてしまふのは
常の事ではあるが、能く思は
人にかかりてぞ、失心状態であ
るから、いかめしい御身の上であ
らう。大將の御母、夕陽の御母
十五日の朝に、十五日の夜中過か
ら十六日の朝にかけての間をい
日はいと花やかに、十六日の朝
の事は、おぼしにくく、
しては、おぼしにくく、
光の思は、おぼしにくく、
で、おぼしにくく、
後、おぼしにくく、
ない、おぼしにくく、
あ、おぼしにくく、
い、おぼしにくく、
た、おぼしにくく、
る、おぼしにくく、
お、おぼしにくく、
先、おぼしにくく、
心、おぼしにくく、

御法

を限りなき。火のいとあかきに、御色はいと白く光るやうはて、
とかくうち紛らはず事ありしうつつの御もてなしよりも、
かひなきさまに、何心なくて臥し給へる御有様の、能かぬ所な
しといはひも更なりや。なのめにだにあらざ、たぐひなきを見
奉るに、死に入る魂の、やがてその御骸にとまらなむと思はゆ
るも、わりなき事なりや。仕うまつり馴れたる女房などの、物
おもほゆるもなければ、院を、何事もおぼし分かれず思さる
御心地を、あながちにしづめ給ひて、限りの御事どもし給ふ。
古へも悲しとおぼす事もあまた見給ひし御身なれど、いとかう
お立ちてはまた知り給はざりける事を、すべて来し方行く未
たぐひなき心地し給ふ。やがてその日とかくをさめ奉る。限りありける事なれば、
見つつも、え過ぐし給ふまじかりけるぞ心憂き世の中なりける。
はるくと廣き野の、所もなく、立ちこみて、限りなき

かめしき作法なれど、いとほかなき煙にて、ほどなくのぼり給
ひぬるも、例の事なれど、あへなくいみじ。空を歩む心地して、
人にかかりてぞ、おぼしにくく、見奉る人も、さばかりい
つかしき御身をと、物の心知らぬ下衆さへ、泣かぬはなかりけ
り。御送りの女房は、まして夢路に感ふ心地して、車よりもま
ろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。昔大將の君の御母君
亡せ給へりし時の晩を、おぼしにくく、かればなほ物の覺え
けるにや、月の顔のあきらかに覺えしを、今宵はただくれ感ひ
給へる。十四日に亡せ給ひて、これは十五日の晩なりけり。日
はいと花やかたさしあがりて、野邊の露も隠れたる限なくて、
世の中、おぼしにくく、いとど厭はしくいみじければ、あ
るとても幾世かは経べき、斯かる悲しさの紛れに、昔よりの御
本意もとげまほしと思はせど、心弱きのちの誘りを思せば、こ
の程を過ぐさむとし給ふに、胸のせきあぐるぞ堪へがたかりけ

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

かの人道も多きは亡き数に入つて
おしき先立つて新古今哀傷
おくれ先立つて新古今哀傷
おくれ先立つて新古今哀傷

古への秋さへ今の心地し濡れにし袖に露をよき添ふ
折からに、よろづの古事おぼし出でられ、何となく秋の
事懸しうかき集め、こぼる涙を拂ひもあへ給はぬ紛れに、御
返し、

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

せぬ歎きをさへうち添へ給はける。御見舞をされる人
御見舞をされる人
御見舞をされる人

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

あはれをも時を過ぎず人に
御見舞をされる人
だから

Handwritten text at the top of the right page, consisting of several lines of small characters.

Main body of handwritten text on the right page, arranged in vertical columns.

Handwritten vertical characters, likely a section title or chapter heading.

Main body of handwritten text on the left page, arranged in vertical columns.

この折の事、心の上、苦勞さ
でも、折の事、心の上、苦勞さ
でも、折の事、心の上、苦勞さ
でも、折の事、心の上、苦勞さ

その折の事、心の上、苦勞さ
でも、折の事、心の上、苦勞さ
でも、折の事、心の上、苦勞さ
でも、折の事、心の上、苦勞さ

先て御方々にも渡り給はず、紛れなく見奉るを慰めに、工、明
仕りまづる。年頃、まめやか、御心とどめ、工などはあらざり、か
ど、時々は見放たぬやうにおぼしたりつる人々も、なか／＼、
斯かる淋しき御獨寝になりては、いと、おぼ／＼、さうにもてなし給ひ
て、夜の御宿直などにも、へなれかれと數多を、御座のあたり引
きさけつのおぶらはせ給ふ。つれ／＼なるさまに、古への物語
などし給ふ折々もあり。名残なき御聖心の深くなりゆくに、つ
ても、さしもあり果つまじかりける事につけつつ、中頃物怨め
しう、おぼしたる気色の、時々見え給ひしなどを思し出づるに、
なぞて、只たはぶれにても、又、おぼ／＼、かたに心苦しき事につけても、
さやうなる心を見え奉り付む、何事にも、ち／＼、じ／＼おぼせし
御心ばへなりしかば、人の深き心もいとまう見知り給ひながら、
ふんじ果て給ふことはなかりしかど、一わたりづつは、いかな
らむとすらむと思したりしに、すこしにても心を亂し給ひけむ

事の、いとほしくやしう覺え給ふさま、胸よりもある心地
し給ふ。その折の事、心の上、苦勞さ、今も近う住りまづる人々は、
ほの／＼聞え出づるもあり。入道の宮の渡り始め給へりし程、
その折はしも、色には更に出だし給はざりしかど、事に觸れぬ
つらなれど、あぢきなのわざやと思ひ給へりし気色のあはれなれど、な
にも、雪降りたりし曉に、立ちやすらひて、わが身も冷え入る
やうに覺えて、空の気色烈しかりしに、いとなつかしう、い
かなるものから、袖のいたう泣き濡らし給へりけるを引き隠し
て、せめて紛らはし給へりし程の用意などを、夜もすがら、夢
にも、又はいかならむ世にかと思ひ續けらる。晴にしも、雪司
にあるる女房なるべし、「いみじうも、積りにける雪かな」といふ
を聞きつけ給へる、只その折の心地するに、御かたはらの淋
しきも、いふ方なく悲し。
憂き世にはゆき消えなむと思ひつつ思ひの外に猶ぞ程ふる

御火桶 圓形の火鉢。

新くてもいとよくかうして全
佛三昧に事すことの出る世で
あつたために今までつらなく
引つらしてあつたが、あつた
に、通してしまつたが、あつた
まづ、自分までつらなく、あつた
にくれるだらう、女が、あつた
だ。

よろしう思はむ、さしたる
でも、おぼつかぬ、さしたる
人、おぼつかぬ、さしたる
おぼつかぬ、さしたる
う、おぼつかぬ、さしたる
ま、おぼつかぬ、さしたる

世のはかなく、世のはかなく
つらさを示す方便として、あつた
が、あつた、あつた、あつた

いみじき事の閉ぢめを、
おぼつかぬ、さしたる
おぼつかぬ、さしたる
おぼつかぬ、さしたる
おぼつかぬ、さしたる
おぼつかぬ、さしたる

さて打捨てられ、源氏の出家後
に取戻された自分達の悲しさを
皆が源氏に申上げたのだ。

見給ひ過ぐさずや、手をつけず
にはおかなかつたのか。
いと傍痛き、中將の君は、あつた
手前、それ、あつた、あつた
あつた、あつた、あつた

例のまぢらには、御手水召して行ひ給ふ。ちづみたる火
起し出で、御火桶参らす。中納言の君、中將の君など、
お前近く、御物語聞ゆ。只、獨寝常よりも淋しかりける、夜のさ
まがな。斯くてもいとよく思ひすまじつべかりける世を、はか
なくもかかづらひけるがな。とうち眺め給ふ。我さへ打捨て
は、この人、おぼつかぬ、さしたる
き、など見渡し給ふ。忍びやかにちち行ひつづ、經など讀み給
へる御辭を、よろしう思はむ事にて、涙をまゐるまじきを、
まして、袖のじがらみせきあへぬまであはれは、明暮見奉る入
人の心地、盡きせず思ひ聞ゆ。この世に、おぼつかぬ、さしたる
ふべき事を、あるまじう高き身には生れながら、又、又、又、
も殊に口惜じき契りにもありけるかなと思ふこと絶えず。世の
はかなく憂きを知らず、佛などのあきて給へる身なるべし。
それを強ひて知らぬがほにながらふれば、斯く今はの夕べ近き

末に、いみじき事の閉ぢめを見つるに、宿世の程もみづからの
心の、さほも、残りなく見果てて心やすきに、今なむ露のは
だしなくなりたるを、これかれ斯くて、あやしよりけに目馴
らす人々の、今はとて行き別れむ程こそ、今一きはの心亂れぬ
べけれ。いとほかなしがし。わろかりける心の程かな」とて、
御目おしのごひ隠し給ふに、紛れずやがてこぼるる御涙を、見
奉る人々、ましてせきとめむ方なし。さて打捨てられ奉りなむ
がられはしさを、おの、打出でまほしけれど、さもえ聞えず、
ひせ返りてやみぬ。
斯くのみ歎き明し給へる曙、ながめ暮し給へる夕暮などの、し
めやかなる折々は、かのおしなべてにはあはれは、あはれは、あはれは、
を、お前近く、かやらの御物語など、し給ふ。中將の君を
さぶらふは、まだ小さくより見給ひ馴れしを、いと忍びつづ
見給ひ過ぐさずやありけむ、いと傍痛きことに思ひて、

その方にはあらず、さうした色
珠にたはれ、出づるに女前
あつたと思ひ、出づるに女前
その形見と見れば、源氏は格
別な感情をもつてみられた。

うなぬ松 花鳥一文選に馬鹿松
と書てうなぬ松とはよみ侍り。
馬鹿は馬の童のごとく、先をす
るどにつきたる松をいふ也。そ
の松に生たる松をうなぬ松とす
云り。譬へば松の松を亡き人の
形見と見る如く、中將君を紫上
の形見と見る心也。心ばせも形
もめやすき故、うへのけはせも形
覺えたる也。

人に向はむ 人に對面してゐる
間だけは、然るべく氣を落着け
て精神を調整しようとしても、
月頃にほけにたはらむ、此頃のぼ
月頃にも出づる身では、見苦し
思ふも出て来て、かう年若い
から人々に迷惑がられるだらう
死んだ後の噂に至るまでもいや
な名折れだと思ふ。
思ひはれて、ばけてしまつて人
にも會はないのだ。
なほ音に聞きて、矢張、眼に開い
て想像する時、見苦し
さをまの當りに見る方が、より
以上には、かかたもの感ぜられ
るものだ。

斯く心變りし後へる 新様に
新の心氣が動いたやうに人
にたとわれ、氣が動いたやうに
して、出家しようと思つて居ら
れて、運世もえうせずにみられ
た。

涙の雨 古今哀傷一最樂の君が
涙は、なれや絶えず涙の雨との
み降る。

さうしき 源氏の徒然を慰
める爲に三宮を六條院へお連れ
になつた。
にはの室ひし 三〇五頁一三行
にあつた事。

遠く見し 此の紅梅を植ゑて
眺めたその主も亡くなつた宿に
それとも知らぬがばに鶯は来て
鳴いてゐる。
めで給ふ方には、花をめで惜し
む處ではないが心が落着かない
で。

・馴れも聞えざりけるを、斯く亡せ給ひてのちは、その方には
あらず、人より殊にらうたきものに心とどめ思したりしものを
と、おぼし出づるにつけて、かの御形見の筋を、ぞあは
れとおぼしなる。心ばせかたちなどもめやすくて、うなる松
に覺えたるけはひ、ただならましよりは、らうしと思はす。
うとき人には更に見え給はず。上達部なども、睦まじき、又御
はらからの宮たちなど、常に参り給へれど、對面し給ふ事をさ
をさなし。人に向はむ程ばかりは、さかしく思ひしづめ、心を
さめむと思ふとも、月頃にほけにたはらむ身の有様、かたくなし
き儼事まじりて、末の世の人にもて惱まれむ、のちの名さへう
たてあるべし、「思ひはれてなむ人にも見えざる」といはれ
むも、同じ事なれど、なほ音に聞きて思ひやることのかたはな
るよりも、見苦しきことの目に見るは、こよなくきはまさりて
をこなり、とおぼせば、大將の君など、どにだに、御簾隔ててぞ

對面し給ひける。斯く心變りし給へるやうに人のいひ傳ふべき
頃ほひをだに思ひのどめてこそはと、念し過ぐし給ひつづ、憂
き世をえ、背きやり給はず。御方々に稀にもうちほのめき給ふ
につけては、まづいとせきがたき涙の雨のみ降りまされば、い
とわりなく、いづ方にもおぼつかなきさまにて過ぐし給ふ。
后の宮は、うちに参らせ給ひて、三の宮を、さうしき御
慰めにはおぼしませ給ひける。年ばばの宜ひしかば、とて、
對のお前の紅梅、取り分きて後見あり給へるを、いとあはれ
と見奉り給ふ。二月になれば、花の木どもの、盛りになるま
だしきも、梢をかしく霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に、
鶯の花やかに鳴き出でたれば、立ちいでて御覽す。
植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らずがほにて來る鶯
とうそぶきありかせ給ふ。
春深くなりゆくままに、お前の有様古へに變らぬを、めで給ふ

大方の世につけて、世間から見
 ては、世の時分なり、世のなり
 大の世に、命を自ら捨てる、考へ
 野山の真に、別すらへ、古の
 大の世に、命を自ら捨てる、考へ
 野山の真に、別すらへ、古の
 大の世に、命を自ら捨てる、考へ
 野山の真に、別すらへ、古の

大方の人目に、世間から見ては
 どれ程に、思はれぬ、心の中
 野山の執着がある、ものでござ
 ます、どうして、易々と、世を
 来ませう、なる事など、出家な
 事なかつたら、後悔するやうな
 事もある、のでございませう、
 おぼし立つ程、容易には決心が
 つきかねた位、な、一旦、出家
 の後は、道心堅固に一生を送る事
 にならうと思ひやられまして、

心に驚かれ、深く感動した事、
 思ひの程に、な、出家の機縁と
 なりませうと、か。
 願に動きなかるべき、明石中宮
 を御覽遊ばす、までは、動搖の御座
 りませぬ、が、私も安心であり
 願しうも存じます。
 きまで思ひのどめむ、それ程ゆ
 っくり、備へて、あては、心深さ
 知つて、心深さに劣る事になる、
 らう。
 故後の言、薄雲女院、薄雲。
 心あらば、古今、薄雲、薄雲の野
 邊の、心あらば、今年、薄雲、
 大の世に、命を自ら捨てる、考へ
 野山の真に、別すらへ、古の
 大の世に、命を自ら捨てる、考へ
 野山の真に、別すらへ、古の
 大の世に、命を自ら捨てる、考へ
 野山の真に、別すらへ、古の

は、いとわるかるべき事と古へより思ひ得て、すべていかなる
 方にも、この世に執とまるべき事なくと心づかひをせしに、大
 方の世にのけて、身（若くは身）のいたづらにはふれぬべかりし頃、
 とさまかうさまに思ひめぐらししに、命をもみづから捨つべ
 く、野山の末にはふらかさむに、殊なる障りあるまじうなむ思
 ひなむしを、末の世に、今は限りの程近き身に、あるま
 じきほど多うかかづらひて、今まで過ぐしてけるが心弱う。
 もどかしき事」など、さして一筋の悲しさは、宜はねど、
 おぼしたるさすの、ことわり（三）に心苦しきを、いとほしう見奉りて、
 野上「大方の人目に何ばかり惜しげなき人だに、心のうちのほど
 しみのづから多う侍るなるを、ましていかでかは心やすくもあ
 ぼし捨てむ。さやうにあさへたる事は、却りてかるくしきも
 どかしきなど立ち出でて、なかりなる事など侍るなるを、
 おぼし立つ程鈍きやうに侍らむや、又遂に住み果てさせ給ふ方探

う侍らむ、と思ひやられ侍りてこそ。古へのためしなどを聞き
 侍るにつけても、心に驚かれ、思ふよりたがふふしありて、世
 を厭ふついでになるとか。それはなほわるき事とこそ。なほ暫
 しおぼし（四）のどめさせ給ひて、宮たちなども大人びさせ給ひ、誠
 に動きなかるべき御有様に見奉りなさせ給はむまでは、亂れな
 く侍らむこそ心やすくも嬉しくも侍るべけれ」など、いと大人
 びで聞えたる気色、いとめやすし。さまで思ひのどめむ心深
 さこそ、淺きに劣りぬべけれ」など宜ひて、昔より物を思ふこ
 となど語り出で給ふなかに、「故後の宮のかくれ給へし春な
 む、花の色を見ても、誠は「心あらば」と覺えし。それは、大
 方の世につけて、をかしかりし御有様を、をさなくより見奉り
 ついて、さるとおめの悲しさも、人より殊に覺えしなり。みづ
 から取り分り志にし物物のあはれはよらぬわざなり。年經ぬる
 人にあぐれて、心をさめむ方なく忘れがたきも、ただ斯かる中

元日に大祭殿に御覽に奉り人に對しては特に人並にもてなすやう御付けられる。
 期日の程のこと、常より殊なるべくとおきてさせ給ふ。○
 ち大臣の御引出、物、品々の祿どもなど、二なうおぼし敷け
 てとぞ。

元日に大祭殿に御覽に奉り人に對しては特に人並にもてなすやう御付けられる。期日の程のこと、常より殊なるべくとおきてさせ給ふ。○ち大臣の御引出、物、品々の祿どもなど、二なうおぼし敷けてとぞ。

元日に大祭殿に御覽に奉り人に對しては特に人並にもてなすやう御付けられる。期日の程のこと、常より殊なるべくとおきてさせ給ふ。○ち大臣の御引出、物、品々の祿どもなど、二なうおぼし敷けてとぞ。

や・つくれ

この巻は古來巻名のみがあつて本文はない。これに就いて種々なる説が行はれてゐるのであるが、大凡次の三點に歸する。

一 作者は巻名のみを書いて本文は書かなかつた。

二 巻名も本文も書いたのであるが、本文は早く逸滅して巻名のみが残つた。

三 もと／＼本文は勿論巻名もなかつたのを、後人のさかしらから、今の如く巻名を假設したものである。

これに關する理由はいかやうにも説き得られるのであるが、定説の發見は蓋し絶望であらう。

湖月抄本にも河内本にも巻名本文共に之を缺くのであるが、今對校に當つて巻名のみを存する事とした。幻卷から匂宮卷の間に源氏は薨去し、その間に八年の歳月が流れた。

光隠れ給ひ

光隠れ給ひ。光君と呼ばれた源氏過去の子孫に、源氏には子孫が大勢あつたが、源氏の二代となるべき人はなかつた。當帝の三の宮、今上の第三皇子の御宮と、六條院で生長された源氏と、御宮は明石中宮殿で源氏の御孫。

ただ世の常の、只尋常一般の美しさと氣品となまめかしさを、持つておられるといふのが二人の元來の持前であつて。

かたへはこよなう一つはさういふ理由で二人が非常に威光があつたのである。紫の上の御心寄せ、御宮は紫上が特別愛して育てられたので、今も二條院に居られる。今上の第一皇子で明石中宮殿。

關心やすき、御宮はやはり氣樂な住みなれた二條院を慕しよく思召すのであつた。

御宮

光隠れ給ひにし、のち、かの御影に立ちつぎ給ふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。神皇御記に源氏の子孫の中に數へるは別體なりありあの御門をかけ奉らむ。は(事)悉し。當帝の三の宮、その同じとどにて生ひ出で給ひし宮女三宮の若君と、この二所なむ、とりくに清らなる御名取り給ひて、その御影の如くげにいとなべてならぬ御有様なめれど、いとまばゆき際には、見るもまばゆい夜は御影まではなかつたあはせざるべし。ただ世の常の人さまに、めでたくあてになまめかしくあはするをもととして、源氏の子孫といふ御影から人望があつて世人が二人に對する敬持御影も源氏の御影よりも格別入てゐるのでさる御中らひに、人の思ひ聞えたるもてなし有様も、古への御響きはひよりも、(は)やや立ちまさり給へる覺えがらなむ、かたへはこよなういつくしかりける。紫の上の、御心寄せ殊にはぐくみ聞え給ひし故、(三)三の宮は二條の院にあはします。春宮をば、宮格を承つてゐてさるやんごとなきものにあき奉り給ひて、御門、今上后、明石中宮いみじくかなしうし奉り、御宮の事かちづき聞えさせ給ふ宮なれば、内裏住をさせせ奉り給へど、御宮の事猶心やすき故郷に住みよくし給ふなりけり。御元服し給ひては、兵

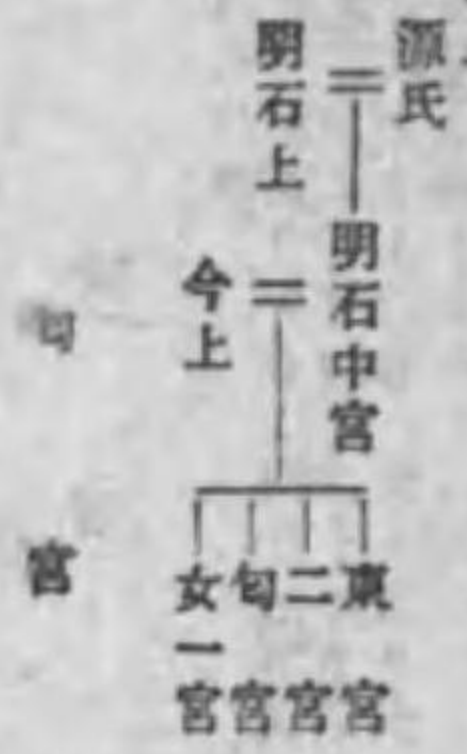
女一の宮 今上の第一皇女で明
石中宮。その世のしつらひを
改めずに住んでおられる。

梅壺を土官が梅壺を宮中にお
ける御宿所にして。右の大
殿夕暮。夕暮。夕暮。夕暮。

その次々 大女以下の姫君達を
も世間でも二宮や三宮へさす
の世間でも二宮や三宮へさす
わが御心より 御自分の心から
にならぬ結縁には興味を持
やうだ。何かはやうのもの
何かはやうのもの 何もさう
同じやうに 型を押しな
句宮の御兄に 型を押しな
と、差延へてはみられるが
又さる御氣色 先方から所望
うなるなら 先方から所望
六の君 宿木をに句宮
の北方となる。

源氏

東の院 二條院の
御處分 形見分け。
三條の宮 朱雀院から賜はつた
御殿である。
今上 明石中宮。存生中心を
留めて置り住んで居た。合
が、その主人の死後昔の御も
つて居るの無常な世相を見
ほとりの大路など 附近の大路
など、誰も通る人もないやう
おぼしたくない。河内本は
おぼしたくない。河内本は
本宿の宿。東北の一處。以前花
散里に住んでおられたが、今
二條東院に移られたので、今
跡に女二宮が引越して来られ
たのである。
二條の院とて 源氏が敷寄を
して二條院や六條院を造替した
のであるが、今では二條院に句
一宮が住んでおられるから新
いふ。源氏



部卿の宮と聞ゆ。女一の宮、六條の院の南の町の東の對を、
その世のしつらひを改めずおはしまして、朝夕に戀ひ惚ひ聞
え給ふ。二の宮も、同じおとどの寢殿を時々の御休み所にし給
ひて、梅壺を御曹司にし給ひて、右の大殿の中姫君を得奉り給
へり。次二宮は次の春宮の御宿所の坊がねにて、いと覺え殊世間から大層喜ばれぬ日もありにも、しう、人がらも
すくよかになむ物し給ひける。大殿の御むすめは、いとあまた
物し給ふ。大姫君は春宮に參り給ひて、又さしるふ人なきさま
たてさぶらひ給ふ。その次々、皆ついで二宮のままにこそはと世
人も思ひ聞え、后明石中宮の宮も宜はすれど、この兵部卿の宮は、さし
も思ひ聞えず。わが御心より起らざらむことなどは、すさまじ
くも思しぬべき御氣色なめり。おとども、何かは、やうのも
のと、さのみうるはしうは、としづめ給へど、又さる御氣色
あらむをば、もて離れてもあるまじうさもひけて、いといたう
かしづき聞え給ふ。六の君なむ、その頃すこし我はと思ひのは

り給へる親王達上達部の、御心つくすくさはひに物し給ひける。
院かくれ給ひてのち、さま／＼つどひ給へりし御方々、泣き泣
く遂におはすべきすみかどもに、おの／＼移るひ給ひしと、
花散里と聞えしは、東の院をぞ御處分のところにて、渡り給ひ
にける。入道の宮は、三條の宮におはします。今後はうちへの
みさぶらひ給へば、院のうち淋しく、人ずくなになりけるを、
右のおとど、「人のうへにて古へのためしを見聞くにも、生ける
限りの世に、心をとどめて造り占めたる、人の家居の、名残な
く打捨てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれに
はかなさ知らるるを、わが世にあらむ限りだに、この院荒らさ
ず、ほとりの大路など、人影かれ果つまじう」とおぼしのたま
はせて、丑寅の町に、かの一條の宮を渡し奉らせ給ひてなむ、
三條殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住み給ひける。
二條の院とて作りみがき、六條の院の春の御殿とて、世にの

あまねき親心にどのお方を
等しなみに扱として仕へてみ
れるにつけ。御上のかやうにて
御上のやうにかうして生を
石上のやうにたうして生を
を捧げてお仕へした事だらう
と御心一つ格別自分の好意を
て戴くやうな事もなくて死な
た事を。

火を消ちたる 法花經「佛此夜
滅度、如新火滅」

御方々 明石上、花散里等。
實たち 秋好中宮、明石中宮、
二宮、匂宮、女一宮など。

げに長からぬにしも 花盛りが
長くないからこそ却て人に賞
されるのだ。

二品宮 女三宮は若菜下に二品
に叙した。

難しき御後見に 中宮が涙を
しい後見と思召して、心から
力にしていらせられた。

御たうばりの加贈 冷泉院の
賜で四位に叙せられた事をい
ふ。たうばりは賜はる事。少女
とあつた。

おはします 冷泉院は御自分の
御座所に近い對の屋を御の部屋
に御りつけたりなど、御自身で
世話を興かかれて。

故致仕の大殿 昔の頭中將。逝
去の事受に始めて見える。逝
女御 柏木の妹で冷泉院に参り
弘隆殿 女御と申す。女一宮を大
限りなくかしづき、女一宮を大
冷泉院は裏をそれと同じ位に大
事にされた。

しりし玉の臺も、明石上人の子孫の傳に及けられたるを記してあるがただ一人の御末のためなりけりと見えて、明石明
石の御方は、御孫の皇子皇女達のあまたの宮たちの御後見をしつつ、御孫を見てみられるあつかひ聞え
給へり。大殿は、いづ方の御事も、昔の御心あききてのままたに、源氏の遺志に従つて何一つ變改する事なく
改め變ることなく、あまねき親心に仕うまつり給ふにも、對の
土の、かやうにてとまり給へらましかば、いかばかり心を盡し
て仕うまつり見え奉らまし、遂に聊かも取り分きてわが心よせ
と見知り給ふべきふしもなくて、過ぎ給ひにしことを、口惜し
く、飽かず悲しう思ひ出で聞え給ふ。天の下の人、院を懸ひ聞
えぬなく、何につけてとにかくにつけても、世はただ火を消ちたるやうに、六條院二條院などの
何事もはえなき敷きをせぬ折なかりけり。まして殿の内の人々、源氏の御去を限りなく歎く事は勿論
御方々宮たちなどは更にも聞えず、源氏の御去を限りなく歎く事は勿論限りなき御ことをばさるも
のにて、又かの紫の上の御有様を、心にたしめて心にしめつつ、よろづの事
につけて、思上を思ひ出で聞え給はぬ時のまなし。春の花の盛りは、源氏げに長からぬにしも覺えさるものになむ。

二品の宮の若君は、源氏が冷泉院に裏を放した院の聞えつけ給へりしままに、冷泉院冷泉院の
御門、取りわきておぼしかしづき、秋好中宮後の宮も、皇子皇女みこたちなどお
はせず、心細うおぼさるるに、大嬉しき御後見に、大まめやかに頼
み聞え給へり。御元服なども、冷泉院院にてせさせ給ふ。十四にて、

二月に侍従になり給ふ。秋右近の中將になりて、御たうばりの
加階などをさへ、何れが、りやのせらいづこの心もとなきにか、急ぎ加へて大人び急ぎ加へて大人び
させ給ふ。おはします御殿近き對を曹司にしつらひなど、みづみづ
から御覽じ入れて、若き人も、童下仕まで、すぐれたるをえり若き人も、童下仕まで、すぐれたるをえり
整へ、若き人も、童下仕まで、すぐれたるをえり女の御氣色よりも、まばゆく整へさせ給へり。うへにもうへにも

宮にもさぶらふ女房のなかにも、かたちよくあてやかにめやすかたちよくあてやかにめやす
きは、皆移し渡させ給ひつつ、院の内を心につけて、住みよく皆移し渡させ給ひつつ、院の内を心につけて、住みよく
ありよく思ふべくとのみ、わざとがましき御あつかひぐさに思わざとがましき御あつかひぐさに思
され給へり。故致仕の大殿の女御と聞えし御腹に、女宮ただ一女宮ただ一
所おはしけるをなむ、限りなくかしづき給ふ御有様に劣らず。限りなくかしづき給ふ御有様に劣らず。

御唐櫃 香の御唐櫃

袖かけ給ふ梅の 古今春上「色
 よりも白くそ哀と思はゆれたが
 袖端に梅の梅ぞも」
 春雨の雫にも 六帖「伊勢」句
 ふ香の雫に思はゆ花なれば折れ
 る雫にけさぞ濡れぬる」
 秋の野に主なき 古今秋上「ぬ
 し知らぬ香こそ句へれ秋の野に
 たが脱ぎかけし藤袴ぞも」
 人の替むる 古今春上「梅の花
 立寄る香にぞしきける」
 香は 句宮は香のやうな體臭
 があるのではないから、
 と外から匂ひを染まさらうとした
 のである。 薫物。

またの御唐櫃に埋もれたる香の香どもも、この君のは、いふよ
 しもなき匂ひを加へ、お前の花の木も、はかなく袖かけ給ふ梅
 の香は、春雨の雫にも濡れ身にしむる人多く、秋の野に主なき
 藤袴も、もとのかえりは隠れて、なつかしき追風殊に、折りな
 しがらなむまさりける。斯く、怪しきまで人の答ひる香にし
 み給へるを、兵部卿の宮なむ、他事よりも挑ましくおぼして、
 それはわざとよろづのすぐれたるうつしをしめ給ひ、朝夕のこ
 とわざひに合せいとなみ、お前の前裁にも、春は梅の花園を眺め
 給ひ、秋は世の人の、めづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩
 の露にも、をさく御心移し給はず、老いを忘るる菊に、衰へ
 ゆく藤袴、物げなき地楡などは、いとすさまじき霜枯の頃ほひ
 までおぼし捨てずなど、わざとめきて、香にめづる思ひをなむ
 立てて好ましうおぼしける。斯かる程に、すこしなよびやはら
 ぎ過ぎて、すきたる方に引かれ給へりと、世・人は思ひ聞えた

すべて斯く立てて、強じて新様
 なるやうな風変わりな事はなさ
 なかつた。

げに拱安しくも、競争しながら
 も若い同志は仲のよかりさう
 な寛の人柄であつた。

心ときめきに、胸を躍らせなが
 ら申込んで来る物もあると、
 さま／＼に、下の「宜ひ寄りて」
 に係る。

冷泉院の一の宮、致仕大臣の御
 城なる弘徽殿の姫宮。

げにとありがたく、姫宮に聞す
 る風評も、成程その通りと傾か
 れる程大變宜しい上に、
 家して、「いとど思ひがたく」に
 かゝる。
 愛しき御有様の、何かにつけて
 姫宮の事を交しく語る者もある
 ので。

り。昔の源氏は、すべて斯く立ててその事と、やう變り、しみ
 給へる方ぞなかりしかし。
 源中將、この宮には常に参りつつ、遊びなどにも、きしろふ物
 のねを吹き立て、げに挑ましくも、若きどち思ひかはし給ひつ
 べき、人のさまになむ。例の世人は、「匂ふ兵部卿、薫る中將」
 と、聞きにくくいひ續けて、その頃よきむすめおぼはする、
 ごとなき所々は、心ときめきに聞えごちなどし給ふもあれば、
 宮は、さま／＼に、をかしうもありぬべきわたりをば宜ひ寄り
 て、人の御けはひ有様をも氣色どり給ふ。わざと御心につけて
 おぼす方は殊になかりけり。冷泉・院の一の宮をぞ、さやうに
 ても見奉らばや、かひありなむかし、と思したるは、母女御も
 いと重く、心にくく物し給ふあたりにて、姫宮の御けはひ、げ
 に、とありがたくすぐれて餘處の聞えもおぼはしますに、まして
 すこし、近くもさぶらひ馴れたる女房などの、委しき御有様の、

なかく心とどめて、なまなが
存世に臭味を待つて、その爲出
うもしらぬ。愛着心が残ら

が今現に心を打込むやうな愛
悟り顔をしてゐられるのかも知
れぬ。

三位の御相 宰相は参議で四位
相當の宰相といふ。宰相は特
中將兼任の人を宰相中將とい

ただ人にては、普通人として
難くも引け目を取らない程、人望
があつて、いふつしやつたが、
身を思ひ知る方、どういふ身
願もあるか、分つてゐるといふ

院の御宮 冷泉院の女一宮。
一つ院の内、一宮は女一宮と一
の結に冷泉院でなしてゐる。

けいとなべてならぬ、
く、深味のある御相が、
い、ない。

本方こそ、冷泉院は、
隔てがまし、はなさらぬ、
只、御宮に、はなして、
つじやるのは、御尤も、
らも、御相、かつたから、

心よりほかの心、思ひがけない
不料、間でも起つたら、女一宮を
手に入れようなどいふ野心が、
と、願の心に病したら、

わが斯く人に、
か、好かれるやうにと生れつ、
て、ある人柄なので、

おのづから、
ま、ぐれに、
多、く、
人、目、
只、何、
が、却、
な、に、
奉、公、
を、希、
望、す、
る、者、
が、多、
か、つ、
た、

事に觸れて聞え傳ふるなどもあるに、いとど忍びがたくおぼす
べかめり。中將は、世の中を深くあぢきなきものに思ひすまし
たる心なれば、なかく心とどめて、行き離れがたき思ひや残
らむ、など思ふに、煩はしき思ひあらむあたりにかかづらはひ
は、つづましく、など思ひ捨て給ふ。さし當りて心にしむべき
事のなき程、さかしたつにやありけむ。人の許しなからむ事な
どは、まして思ひ寄るべくもあらず。十九になり給ふ年、三位
の宰相にて、なほ中將も離れ給はず。御門、後の御もてなしに
ただ人にては、憚りなきめでたき、人の覺えにて物し給へど、心
の内には、身を思ひ知る方ありて、物おはれに、などもありけれ
ば、心にまかせて、はやりかなるすきごと、を、さく好まず、
よ、おのづから、おのづから、おのづから、おのづから、おのづから、
人にも知られ給へり。三の宮、年に添へて心を碎き給ふめる院
の、姫宮の御おたりを見るにも、一つ院の内にあけくれ立ち馴れ

給へば、事に觸れても、人の有様を聞き見奉るに、げにいとな
べてなす、心にくく故々しき御もてなし限りなきを、同じく
は、げにかやうならむ人を見むにこそ、生ける限りの心ゆくべ
きつまなれ、と思ひながら、大方こそ隔つる事なくおぼしたれ、
姫宮の御方さまの隔ては、こよなくけどほくならはさせ給ふも、
ことお身に煩はしければ、あながちにもまじらひ寄らず、もし
心よりほかの心もつかば、我も人もいとあしかるべき事、と思
ひ知りて物馴れ寄る事もなかりけり。
わが斯く人にめであられむとなり給へる有様なれば、はかなくな
げの言葉を散らし給ふあたりも、こよなくもて離るる心なく、
靡きやすなる程に、おのづからなほざりの通ひ所もあまたにな
るを、人のために事々しくなともてなさず、いとよく紛らはし、
そこはかとなくなさけなからぬ程の、なかく心やましきを、
思ひ寄れる人はいざなはれつつ、三條の宮に参り集まるは數多

あつたが、益然關係が切れてしまふよりは、心細いな
がらも痛めて。河内本は本の儘。
さすがに冷かながらも、懐し
みのある見込みのある人の
心にはかかる。自分で自分
の心だまされてゐるやうな
朝夕に御目かれず、朝夕
お例を離れないのをせめて
孝行としたいと思ひます。

ゆかしげなき、夕露と露とは異
腹ながら兄弟であるから。
なずらひなるべき。比較される
人も得られない世の中だ。
やんごとなきよりも、身分の高
い御座の御座の御座の御座
侍の第六女は成人されるにつ
れて、すぐれた器量であり氣立
も申分がないのだが、
世の變の世間からとかく
世の變の世間からとかく
世の變の世間からとかく
世の變の世間からとかく

わざとはなくて、殊更に見せる
やうな顔はしないで、あの人の
度心をとめられるに違ひない。

賭弓の遺囑 賭弓は正月十八日
左右近衛の合人の射をみそなは
す儀。その儀果てて勝方の大將
がわが方人を招いて催す宴を
要といふ。
后腹 明石中宮腹の皇子達。

四の御子 今上の第四皇子で、更
衣服の常陸宮と申上げる方は、
例の左、いつも勝ちつけてゐる
左近衛方。

きさい腹の 明石中宮腹の第五
皇子。申遊宮と申す。

あり。つれなきを見るも、苦しげ・なるわざなめれど、絶えな
ひよりはと、心細きに思ひわびて、さもあるまじき際の人
人の、はかなき契りに頼みをかけたる多かり。さすがにいと
つかしう見どころある、人の御有様なれば、見る人皆心には、
からるるやうにて見過ぐさる。馬宮のあはしまさむ世の限りは、
朝夕に御目かれず御覽せられ、見奉らむをだに」と思ひ宣へ
ば、右のあとども、あまた物し給ふ御ひすめたちを、一人々々
はと心ざし給ひながら、え言にいで給はず、さすがにゆかしげ
なき中らひなるをと思ひなせど、この君たちをさきでほかに
は、なずらひなるべき人を求め出づべき世かは、とおぼし煩ふ。
やんごとなきよりも、内侍のすけ腹の六の君は、いとすぐれ
てをかしげに、心ばへなども足らひてあひ出で給ふを、世の豊
えのあとしめざまなるべきしも斯くあたらしきを、心苦しうあ
ぼして、一條の宮の、さる扱ひぐさも給へらで、さうくしき

に、迎へ取りて奉り給へり。わざとはなくて、この人々に見せ
そめてば、必ず心とどめ給ひて、人の有様をも見知る人は、
殊にこそあるべけれ、などあぼして、いとつくしうはもてな
し給はず、今めかしくをかしきやうに物好みせさせて、人の心
つけむたより多く作りなし給ふ。
賭弓の遺囑のまうけ、六條の院にて、いと心殊にし給ひて、親
王をもあはしまさせむの心遣ひし給へり。その日親王たち、大
人におはするは、皆さぶらひ給ふ。后腹のは、何れともなく、
けだかく清げにおはしますなかに、この兵部卿の宮は、げに
いとすぐれてこよなう見え給ふ。四の御子、常陸の宮と聞ゆる、
更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣り給へり。例の
左、あながちに勝ちぬ。例よりは疾く事果てて、大將まかで給
ふ。兵部卿の宮、常陸の宮、きさい腹の五の宮と、一つ・車に
招き乗せ奉りて、まかで給ふ。宰相の中將は負け方にて、音な

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、

0.123456789

春日の神の御ことわり。皇孫は必ず藤原氏から立つべき由の春日明神の神託。少女巻にも「藤原氏のうちしきり後に居給はむこと世の人許し聞えず」とあつた。いと時めき、大君が春宮の御事を...

殿はつれづれなる。眞木柱が大君に附添つて共々宮中に参られ、うな氣がして、邸内は静しくなつた。東の姫君と、兵部卿宮の御女で、よろづの御こと暨ひ、大君や中君が宮の御方からさまんく、の事を習ひ、

うち参り、大君を春宮に入内せしめた事。さるべからむさまに、紅梅が以前眞木柱に言つた調。宮の御方の身の上を然るべきやうにきめて仰しやつて下さい。實子と同様に世話をしませう。更にさやうの前、「物恥ぢを世の常ならずし給ひて」とあつた。あの人は、さうした結婚となふやうな事は、さう考へてない様子です。お氣の毒でせう。世を背く、尼になつてでも、世間の物笑にならぬやうに輕はずみな失脚なしに暮してほしいと思つて居ります。

御さまなり」と宜ひながら、まづ春宮の御事をいそぎ給ひて、春日の神の御ことわりも、わが世にやもし出で来て、故あつた。院の女御の御事を、胸痛くあはしてやみにし慰めのこともあらなむ、と心のうちに祈りて、参らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふまじ人々聞ゆ。斯かる御まじらひの馴れ給はぬ程に、はかしくしき御後見なくてはいかがとて、北の方添ひてさぶらひ給ふは、誠に限りもなく思ひかしづき後見聞え給ふ。殿はつれづれなる心地して、西の御方は一向にならひ給ひて、いとさうしうながめ給ふ。東の姫君も、うちとしくかたみにもてなし給はで、夜々は一所に御殿ごもり、よろづの御こと習ひ、はかなき御遊びわざをも、こなたを師のやうに思ひ聞えてぞ誰も習ひ遊び給ひける。物恥ぢを世の常ならずし給ひて、母北の方にだに、さやかにほをささし向ひ奉り給はず、かたはなるまでもてなし給ふものから、心ばへけはひの埋れたるさまならず、愛敬づき給へる事はた、人よりすぐれ給へり。斯くうち参りや何やと、わが方さまをのみ思ひいそぐやうなるも心苦し、など思して、馬さるべからひさまに思し定めて宜へ。同じ事とこそ、仕うまつらめ」と母君にも聞え給ひけれど、更に「さやうの世づきたるさま、思ひ立つべきにもあらぬ氣色なれば、なかん、ならむ事は心苦しかるべし。御宿世にまかせて、世にあらむ限りは見奉らむ。のちぞあはれにうしろめなけれど、世を背くかたにても、おのづから人笑へに、あはつべき事なくて過ぐし給はなむ」など、うち泣きて、御心ばせの思ふやうなる事をぞ聞え給ふ。いづれも分かず親がり給へど、御かたちを見ればやとゆかしうおぼして、馬隠れ給ふこそ心憂けれ」と恨みて、人知れず、見え給ひぬべしやとのぞきありき給へど、絶えて片そばをだにえ見奉りたまはず。馬うへおはせぬ程は、立ちかはりて参りくべきを、疎々しくおぼし分くる御氣

わが御姫君たちを、以下紅梅の
心中、自分の實の姫君達を、人に
は劣るまいと自慢してゐたが、
世のなかの廣きうちには、世の中は
廣い、その廣い世の中の内は簡
單にはいかないものだ。
たぐひあらじと、自分の姫君達
は無類の美人だと思つてゐるの
に。

さもまねび取りつべく、相當に
弾けるやうになるといふ自信が
あるのでせうか。「侍るらむ」の
所河内本は本の體。琵琶の音は生半
なまかたほに、琵琶の音は生半
端なのは聞きにくいものです。

實は取り立てて、私は取立てて
何を習つたといふ事もありませ
んが、昔年盛りの時代に修行し
たお蔭やら、聞き分けるだけのし
事は何樂器にかけてもさう不得
手ではありませんでした。

昔覺え侍る、昔の音色そのまま
のやうに聞える。
源中納言、源の中納言に昇進の
事初見。

手づかひすこし、撥さばきの少
し消えない點が左大臣に及ばな
いやうに思ひますが。

御こと、絃樂器の總稱。ここで
は琵琶の事。
押手、絃を押へて弾く事。琵琶
は押手の靜かなのをよいとする
もので、撥が、柱を振る位置の
加減で、撥音の音色も變つて、
めかしくも聞える、それが女の
琵琶として知つて面白いもので
す。

心にまかせて、氣儘に奥の方へ
引込んでゐるので、女房達までが
さぶらふ人さへ、女房達までが
無愛相な仕打をするのが面白く
ない。
宿直婆、殿上童の宿直婆は直衣
を着て笑を解きさげて居るをい
ふ。
置景殿、大納言の大君。

色なれば、心憂くこそ」など聞えて、御簾の前に居給へば、御
いらへなどほのかに聞え給ふ御聲けはひなど、あてにをかしく、
さまかたち思ひやられて、あはれに覺ゆる、人の御有様なり。
わが御姫君たちを、人に劣らじと思ひおこれど、この君にえし
もまさらずやあらじ、斯かればこそ世のなか、廣きうちは煩は
しけれ、たぐひあらじと思ふに、まさる方もおのづからありぬ
べかんめり、など、いとどいふおかしう思ひ聞え給ふ。馬月頃何
となく物さわがしき程に、御ことのねをだに承らで久しくなり
侍りにけり。西の方に侍る人は、琵琶を心に入れて侍る。さも
まねび取りつべくやあはえ侍るらむ。なまかたほにしたるに、
聞きにくき、物のねがらなり。同じくは、御心とどめて教へさ
せ給へ。翁は取り立てて習ふ物侍らざりしかど、そのかみ盛り
なりし世に、遊び侍りし力にや、聞き知るばかりのわきまへは、
何事にもいとつきなくは侍らざりしを、打解けても遊ばさねど、

時々承る御琵琶のねなむ、昔覺え侍る。故六條の院の御傳へに
て、左のおとどなむ此頃世に残り給へる。源中納言、兵部卿の
宮、何事にも昔の人に劣るまじう、いと契り殊に物し給ふ人々
にて、遊びの方は取り分きて心とどめ給へるを、手づかひすこ
しなよびたる撥音、などなむ、おとどには及び給はずと思ひ給ふ
るを、この御ことのねこそ、いとよく覺え給へれ。琵琶は、押
手しづやかなるをよき事にするものなるに、柱さす程、撥音の
ささ變りてなまめかしう聞えたるなむ、女の御ことにてなかな
かをかしかりける。いで遊ばさむや。御こと參れ」と宣ふ。
女房などは、隠れ奉るもをさくしなし。いと若き上臈たつが、
見え奉らじと思ふはしも、心にまかせて居たれば、馬さぶらふ
人さへ斯くもてなすが安からぬ」と腹立ち給ふ。若君、内へ
參らむと、宿直婆にて參り給へる、わざとうるはしきみづらよ
りも、いとをかしく見えて、いみじくうつくしと思しけり。麗

中宮の上の御局より若君の参
内した時は、御局が中宮の上局
からわが宿直室へ歸られる途中
であつた。上局は中宮女御更衣
などの清涼殿に出仕された時の
御部屋。

うちならで、禁中ばかりでなく
氣樂な私の家へも時々は遊びに
いらつしやい。

この君召し放ちて、句宮がこの
若君だけを一人宿直室へ呼んで
語られるので、他の人達は遠慮
して近くへも寄つて来ず、又退
出したりして静かになつたの
で。

時取られて、大君に寵を奪はれ
て後殺がわるいだらう。
お前にはしも、あなたのおそば
には居りたく思ひます。大君は私を
一人前の人間にもなつておな
いと余儀にもおいておられな
いふ事だ。私と同じく珍らし
くもかき、私を愛して下さらぬ
やうな方は、私を愛して下さらぬ
かと、そつと願んで見て下さい。

懸みてのちならましかば、
の歌を贈らうに、
引歌未見、恨ての夜さへ人の
色に取られて、
は上句一紅に色をばかへて梅の
お好きな花だから。梅は句宮の
毒雲にもえ参らず、
君から御傳言があつたのに。

心知らむ、三七四頁「知る人ぞ
知る」とあるのを受けた言葉。
大納言の御心は、
君を自分と思つてゐるらしい
と宮はそれと歌の意とを考へ合
せて、
ので、
りした返歌はなさらなかつた。

中宮の上の御局より御宿直所に出で給ふ程なり。殿上人あまた
御送りに参るなかた、見つけ給ひて、
まかでにし。いつ参りつるぞ」など宜ふ。疾くまかで侍りに
しくやしさに、「まだうちにははします」と人の申じれば、急
ぎまわりつるや」と、をさなげなるものから、馴れ聞ゆ。
ちならで、心やすき所にも時々は遊べかし。若き人どもの、そ
こはかどなく集まる所ぞ」と宜ふ。この君召し放ちて語らひ給
へば、人々は近うも参らず、まかで散りな。どして、しめやか
になりぬれば、
いと繁う思ほし、まとはすめりしを、時取られて入わるかめり」
と宜へば、
しも」と聞えさして居たれば、
たるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。ふるめかしき
同じすぢにて、東と聞ゆなるは、あひ思ひ給ひてむやと、忍び

て語らひ聞えよ」など宜ふついでに、この花を奉れば、
みて、
枝のさま花房、色も香も世の常ならず。
取られて、
く、取り並べても咲きけるかな」とて、御心とどめ給へる花な
れば、
てこなたにを」と召しこめつれば、
かしく思ひぬへくかうばしくて、けちかく臥せ給へるを、
心地には、たぐひなく嬉しくなつかしく思ひ聞ゆ。
あるじは、
らむ人になどこそ聞き侍りしか」など語り聞ゆ。大納言の御
心ばへは、
心は殊にしみぬれば、この返りごとけさやかたも宜ひやらず。
つとめてこの君のまかづるに、

花の香に誘はれぬへき身なりせば風の便を通ぐさまじやば
な私でしたら、かうしたおたよ
思ひやかに、こつそり宮の御方
に手引してくれ。

かひあるさまにて、若君は宮の
御方を句宮へと思つてゐるので
ある。

同じ事とは、同じ姉君故離の世
を見ても同じ氣持にみられさ
うなものが、宮の御方をさう
出まなかつた事が、残念故、せめ
思つてゐた所とて、あの花のつ
いでを解しく思ふ。

本つ香の、もどく、芳ばしい君
のお袖が、濡れたならば、花も一
方ならぬ名を博する事、でせ
う。愛嬌第一、もとのかあるだ
にある梅の花いとど、匂ひのは
るかなるかな。本宮にこ
んなことをいふ仲にならうとい
ふ考があるのか。申君を愛さう
といふ後りなのか。

花の香を、花の香に匂ふ宿に訪
ねて行つたなら、あまりに色め
かしい心と人が非難しないでせ
うか。

若君の、若君が先夜禁中に宿直
して、翌朝私方へ来ました折、大
層よい句をさせました。折、大
外の人は、矢張若君自身、何と思
つてゐましたのに、春宮がそれ
と思ひついて。

ここに御せうそや、あなたか
ら句宮にお手紙でもおあげにな
りましたか。そんな様子も見え
ませんでした。

花の香に誘はれぬへき身なりせば風の便を通ぐさまじやば
さて、これからはお父さんいらいらおせつたいをさせないで早なほ今は翁どもにさかしらせさせて、忍びやかに「と、
返すく、宜ひて。この君も、東のをば、やんごとなく睦まじう
思ひましたり。なかく、異方の姫君は、見え給ひなどして、例
のはらからのさまなれど、童心地に、いとあつちもあつちあらま
ほしうあはする心ばへを、かひあるさまにて見奉らばやと思ひ
ありくに、春宮の御方の、いと花やかにもてなし給ふにつけて、
同じ事とは思ひながら、いと飽かず口惜しければ、この宮をだ
にけぢかくて見奉らばやと思ひありくに、嬉しき花のついでな
り。これは昨日の御返りなれば見せ奉る。耳ねたげにも宜へる
かな。あまりすきたる方に進み給へるを、許し聞えずと聞き給
ひて、左のふとど、我等が見奉るには、いと物まめやかに御心
をさめ給ふこそをかしけれ。あだ人にせむに足らひ給へる御さ
まを、強ひてまめだち給はむも、見所すくなくやならまし」な

ど、しりうごちて、今日も參らせ給ふに、又、
「本の香の匂へる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむ
とすきく、しや。あなかしこ」と、まめやかに聞え給へり。
にいひならさむと思ふ所あるにやと、さすがに御心ときめきし
給ひて、
花の香を匂はす宿にためゆかば色にめづとや人の咎めむ
など、なほ心解けずいらへ給へるを、心やましと思ひ居給へ

北の方まかで給ひて、うちわたりの事宜ふついでに、若君の、
一夜宿直してまかり出でたりし匂ひの、いとをかしかりしを、
人はなほと思ひしを、宮のいと思ほし寄りて、「兵部卿の宮に近
づき聞えにけり、うへ我をばすさめたり、」と氣色取り、
んじ給ひ、もこそをかしかりしか。ここに御せうそやありし。
「も見えざあしを」と宜へば、耳さかし。梅の花めで給ふ君な

心おかれ給ふ 人から敬遠され
る事もあつた關係からか、今で
は玉堂は誰にも近親中の交際
はえうなさらぬ。

なか／＼ 玉堂の近親よりも、
血のつながらの夕霧が却つ
て。男君たち 玉堂の腹。右兵衛督、
右大辨、源中將。
心もとなく 官位昇進などに關
して不安を覺え悲しい事もある
が。

大人び給ひぬらむ 主上も姫君
達をよみつづつ絶えず御内命は下
りけれども。

皆人無徳に 女御更衣違誰もが
かたなしの有様であられる。又
人に劣つたみじめな有様で居る
人を見つた心配の種だらうと
玉堂は思つて、宮仕を躊躇して
みられる。冷泉院の思召に背
かかると、恨ましく仰せ
られた。恨ましく仰せられた。
かたなしの有様であられる。又
人に劣つたみじめな有様で居る
人を見つた心配の種だらうと
玉堂は思つて、宮仕を躊躇して
みられる。冷泉院の思召に背
かかると、恨ましく仰せられた。
恨ましく仰せられた。

みなりまさり給ふ御けはひに歴されて、皆人無徳に物し給ふめ
る末に参りて、遂に目をそばめられ奉らむも煩はしく、又人に
劣り、かすならぬさまにて見む、はた心づくしなるべきを。
ぼしたゆたふ。冷泉院よりいと懇に思し宜はせて、かんの
君の昔、本意なくして過ぐし給ひしつらさをさへ、とりかへし恨
み聞え給ひて、冷泉院よりいと懇に思し宜はせて、かんの
捨て給ふとも、うしろやすき親になずらへて、ゆづり給へ」と、
いとまめやかに聞え給ひければ、いかがはあべき事な。
らむ、みづからのいと口惜しき宿世にて、思ひの外に心づ
きなしとあはされにしかば、恥かしう忝きを、この世の末にや
御覽じなほされまし、など定めかね給ふ。かたちいとようあは
する聞えありて、心かけ申し給ふ人多かり。右の大との殿人
の少將とかいひしは、三條殿の御腹にて、兄君たちよりも引き
越し、いみじうかしづき給ひ、入がらもいとをかしかりし君、

ゆかり、そこらこそは世に・廣ごり給へ・ど、なか／＼やえ
ごとなき御中らひの、もとよりも親しからざりしに、故殿の
なさけすこしおくれ、むら／＼し過ぎ給へりける御本性にて、
心おかれ給ふ・事もありけるゆかりにや、誰にもえ懐しう
聞え通ひ給はず。六條の院には、すべてなほ昔に變らずかすま
へ聞え給ひて、亡せ給ひなむ後の事ども書きあき給へる御そ
ぶんの文どもにも、中宮の御次に加へ奉り給へれば、右の大
などは、なか／＼その心ありて、さるべき折々音づれ聞え給ふ。
男君たちは御元服などして、あのか／＼大人び給ひにしかば、殿
あはせでのち、心もとなくあはれなる事・もあれど、あのか
らなり出で給ひぬべかめり。姫君たちを、いかにもてなし奉ら
むと思し亂る。うちにも必ず宮仕の本意深きよしを、あとの
奏しあき給ひ・ければ、大人び給ひぬらむかしと、年月を推し
量らせ給ひて、仰言絶えずあれど、中宮のいよく並びなくの

胸の御心ばへを 故六條院のお
心と思ひ出されて、悲しきもの
に、その御形見として、あな
たの外にはございませぬ。

ここかしこの 女三宮邸玉露邸
それ／＼に仕へてゐる女房達。

大納言 藤大納言。致仕大臣の
息で右大臣の四君腹。眞木忠頼
右大臣の折高砂を断つた。後の紅梅

世と共に 下の「うちしめりて
云々」に「く。人少將は、父
母に格別愛され、人少將は、父
母の、始終枕み込んでゐる。れ
のため、物思はしげに見える。

昔にかはらず 昔と同じく几帳
隔てて。
その事となくて 用事も無いの
で御無沙汰して居りました。
うち参りより 参内以外の田あ
るきなどはきまりわるくなつて
しまひまして、昔物語をした
折々もありますが、大抵は其儘
に過ぎて残念です。

必ずその志 こちらの好意を見
知つて頂くやうに親切に御用を
勤めよ。

思しかずまふる 人がましく思
召してお訪ね下さいませにつけ

はか／＼しう後見なき かつか
りした後見のない人が宮仕に出
る事は却つて見苦しいものを
と、それやこれや考へて迷つて
居ります。

物・・聞え給ひなす。三院の御心ばへを思ひいで聞えて、
慰む世ならういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも、誰をか
は見奉らむ。右のおとどは事々しき御程にて、ついでなき對面
も難きを、など宣ひて、はらからつらに思ひ聞え給へれば、
かの君も、さるべき所に思ひ、
き／＼しさも見え、いといたうしづまりたるをぞ、ここかし
この若き人ども、口惜しくさう／＼しき事に思ひて、いひ惱ま
しけり。

睦月の朔日ごろ、かんの君の御はらからの大納言、「高砂」うた
ひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、眞木柱の一つ腹など参り給
へり。右のおとども、御子ども六人ながら引きつれて、
り。御かたちよりはじめ、飽かぬ事なく見ゆる、人の御有様
覚えなり。君たちも、いと清げにて、年の程よりは、
官位も過ぎつつ、何事を思ふらむと見えたるべし。世と共に、

おとどは、かしづかれたるさま殊なれど、うちしめりて、思
ふことありがほなり。おとどは御几帳隔てて、昔にかはらず御
物語聞え給ふ。その事となくて、しば／＼も、え承らず。年
のかず添ふまゝに、うち、参りより外のありきなど、うひ／＼
しくなりにて侍れば、古への御物語も、聞えまほしき折々多く
過ぐし侍るをなむ。若きをのこどもは、さるべき事には、召し使
はせ給へ。「必ずその志御覽せられよ」と誠め侍り」など聞え給
ふ。三今は斯く世に經るかすにもあらぬやうになりゆく有様を、
思しかずまふるになむ。過ぎにし御事も、いとど忘れがたく思
う。給へられける」と申し給ひけるついでに、院より宣はするこ
と、ほのめかし聞え給ふ。三はか／＼しう後見なき人のまじら
ひは、なか／＼見苦しきをと、かた／＼思ひ給へなむ煩ふ」と
申し給へば、うちちに仰せらるる事のあるやうに承りしを、い
づ方に思ほし定むべき事にか。院は、げに御位を去らせ給へる

世にありがたき世にもまれな御姿は、いつ迄もお若くもいらつしやるのですから、私も人並の恨みを持つて居つたらと思つては居るのですが、お立派な方々の仲間入りさせしやうな御の儀な事が残念です。

女一の宮の女御 女一の宮の御女御弘徽殿と申し冷泉院の御女御、弘徽殿と玉童とは異母姉妹、玉童が院に姫君をあげる事は最も憚るべき事であるから夕霧が懸念したのである。つれづれに、此頃ひまになつて所在がないので、院諸共に世話を退屈せざるにしたいからなどとお勧め下さいますにつけて、私もどうしたらいいかと思案する所まで漕ぎつけたのでございませう。

朱雀院の古き 朱雀院に昔から心を寄せてゐる人々、又源氏に交遊の深かつた人々も、それやこれやの關係から、女三宮は朱雀院の皇子で源氏の北方である。入道の宮 女三宮、河内本は本左近の中將、以下三人共駿馬の子で玉童の腹。

そこら大人しき若君たち 今日夕霧などと一緒にこの邸に來られた人々をいふ。何れかは、不器量な人は一人もいない。立ちおくれして、他の公達より發れて顔を出された。

この殿の、こちらの姫君の御そばには、この方を並べて御夫婦として眺めたいものだ。姫君と聞ゆれども、いくら世間知らずの姫君でも、物の分る方なら、ほんとい人一信美しい方なやうだと、その美しさを誤別される事だらうと思はれる。かんの殿 玉童、東の階より昇り、御念誦堂の階段。

おほどか 初登殿の節まはしも大やうでこまかでない事。言はずくぬに、驚は同少なに取置ましておるので、女房達は憎ら

にこそ盛り過ぎ、たる心地すれど、世にありがたき御有様は、ふりがたくのみおはしますめるを、よろしう生ひ出づる女子侍らましかば、と思ひ給へ寄りながら、恥かしげなる御なかに、まじらふべきものの、侍らでなむ口惜しう思ふ給へらる。そもく、女一の宮の女御は、許し聞え給ふや。さきくの人、さやうの憚りにより、滞ることも侍りし。」と申し給へば、女御なむ、つれづれにのどかになりたる有様も、同じ心に後見て慰め、まほしきを、などの、かの勸め給ふにつけて、いかがななどだに思ふ給へ寄るになむ」と聞え給ふ。これかれ此處に集まり給ひて、三條の宮に参り給ふ。朱雀院の古き心物し給ふ人々、六條の院の方さまのも、かたぐにつけて、なほか入道の宮をば、えよぎず参り給ふなめり。この殿の左近の中將、右中將、侍従の君なども、やがておとどの御供に出で給ひぬ。引きつれ給へるいきほひ殊なり。

夕つけて四位の侍従参り給へり。そこら大人しき若君たちも、あまたさまくに、何れかはわろびたりつる。皆めやすかりつるなかに、立ちおくれしてこの君の立ち出で給へる、いとこよなく目と、まる心地して、例の物めでする若き人達は、「なほ殊なりけり」などいふ。「この殿の姫君の御かたはらには、これをこそさし並べて見め」と、聞きにくくいふ。げにいと若うなまめかしきさまして、うち振舞ひ給へる匂ひ香など、世の常ならず。姫君と聞ゆれども、心おはせむ人は、げに人よりはまざるなめりと、見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿、御念誦堂におはして、玉こなたに」と宣へば、東の階より昇りて、戸口の御簾の前に居給へり。お前近き若木の梅、心もとなくつばみみて、鶯の初聲もいとおほどかなるに、いとすかせ奉らまほしきさまのし給へれば、人々はかなき事をいふに、言はずくぬに心にく、き程なるを、ねたがりて、宰相の君と聞ゆる上臈

あぢきなうぞ 恨みをいつた
が、それは奥さましであつたの
人は皆の歌 なた方は皆花の
やうに美しい 薫に心をお移しに
なるでせう。あなた方に見捨て
られた私は春の夜の間に迷つて
居ります。

折からや 興を感ずるのも折に
よつてのものです。必ずしも薫
君にのみ(香ばかりに)私共の
心が移つたといふのでもござい
ませぬ。

見給へとおぼしう 玉璽にも見
てくれとの頼りらしく。
竹河の 昨夜竹河の歌で意中の
片端をほのめかしました。私
の深い思ひをお察し下さつた。私
せうか。姫君を許し給へる意で
ある。

竹河に あなたが早々お歸りに
なつたのも御尤もです。私方に
は何もあなたのお心のとまるや
うな趣向もなかつたのですか
ら。このふしを 歌の「ひとふ
しに深き心の一云々の詞を受け
ていふ。薫はこれをきつけかけに
して。薫はみ寄る。姫君への思ひを
はのめかす。
近きゆかりにて 薫と親しい間
柄になつて朝夕仲よく交はりた
いと思つた。伊行御引「櫻咲
く櫻の山の櫻花散る櫻あれば
ひくもれ一古今賀「櫻花散りか
なる道まがふがに」

姫君 女子が数人ある場合長女
を大君又は単に姫君といひ、次
女を中君、以下三の君、四の君
といふ。
げにただ人にて 三六六頁に「姫
君をば更にただのさまにも思し
おきて給はず」とあつた詞を受

かうほのめき寄るめれば、女達が(か)に皆人これにこそ心寄せ給ふらめ、わ
が身はいとどくんじいたく思ひ弱りて、あぢきなうぞ怨むる。
人は皆花に心を移すらむ獨りぞまどふ春の夜のやみ
うち歎きて立てば、薫の内のある女房内の人の返し、
折からや哀も知らむ梅の花只かばかりに移りしもせじ
あしたに四位の侍従のもとより、玉璽方のあるじの侍従のもとに、
べは、いと亂りがはしかりしを、人々いかに見給ひけむ」と、
見給へとおぼしう、女に見せる風に姫君がかいたものである假名がちに書きて、河心に我が心をひかせたもの端に、
竹河のはし打出でしひとふしに深き心の底は知りさや
と書きたり。玉璽や姫君が附られる寝殿にもて参りて、これかれ見給ふ。玉手なども
いとをかしうもあるかな。薫はどうしたお方でいかなる人、今より斯くとのひ給
ふらむ。をさなくて院にもおくれ奉り、女三宮が御立立たない方の方された母宮のしどけなうおぼ
し立て給へれど、なほ人に、玉璽の子はまさるべきにこそはあめれ」と
て、玉璽かんの君は、玉璽の子この君だちの手などあしき事を恥かしめ給ふ。

返りごとげにいと若く、(香く)よべは水驛をなむ人々答め聞ゆ
めりし。
竹河に夜を更かさじと急ぎしもいかなる節を思ひおかまし
げにこのふしを初めにて、御侍この君の御曹司におはして、つこ氣色
ばみ寄る。少將の推し量りしもしるく、皆入心寄せたり。侍従侍従
の君も若き心地に、近きゆかりにて、あけくれ睦びまほしう思
ひけり。
彌生になりて、咲く櫻あれば散りかひ曇り、大方の盛りなるこ
る、のどやかにおはする所には、紛るる事なく、端近なる罪も
あるまじかめり。その頃十八九の程、にやおはしけむ、御かた
ちも心ばへも、とりににぞをかじき。姫君はゆとあざやかに
けだかう、今めかしきさまし給ひて、げにただ人にて見奉らば、
似げなうぞ見え給ふ。櫻の細長、山吹などの、折にあひたる色
あひの、なつかしき程にかさなりたる裾まで、愛敬のこぼれ落

多くは玉雲に御心引かれて、昔から思はれるので、何かにかこつけてこの人に接近なさうとすので、姫君の宮仕の事をさうした意味であるのも多くはなほ物のほえなき院へあがるのではもう一つ宮仕榮えがしなげにいと見奉らまほしき院は人もいと見奉らまほしき院はるたいやうな御姿は比世にかかつてお過ぎになつたといふ感じは

春宮はいかが院へよりは春宮にあげては如何ですか。初めより春宮へは最初から右大臣の姫君といふ身分の高い方が御寵愛を御占しておいでです。うすからなまかな宮仕の種ですから。種ですから。

只今はかひあるさまに差當つては御奉公がひのあるやうに取計らつて下さるでせうに。

かんの君、左近中將などのやうな一層の若返の類といはれる年のわりには斯く大人しき、人の親になり給ふ御年の程思ふよりは、いと若う清げに、なほ盛りの御かたちと見え給へり。冷泉院の御門は、多くは玉雲のこの御有様のなほゆかしう、昔戀しうあはし出でられければ、何につけてかはと思しめぐらして、姫君の御事を、あながちに聞え給ふにぞありける。院へ参り給はむことは、中將等がこの君だちぞ、「なほ物のほえなき心地こそすべけれ。よろづの事、時の勢力に養ふのを苦しめ御するやうに思ひます時につけたるをこそ世人も許すめれ。げにいと見奉らまほしき御有様は、この世にたぐひなくおはしますめれど、盛りならぬ心地ぞするや。こと笛のしらべ、花鳥の色をもねをも、時節々々人の興味も引くものです時に隨ひてこそ入の耳にもとまるものなれ。春宮はいかが、侍の第一女など申し給へば、侍の第一女「いさや、初めよりやんごとなき人の、かたはらもなきやうにてのみ物し給ふめればこそ、なかくにたてまじらはむは、胸痛く人笑はれなる事もやあらむとつしましければ、殿は存生はらば殿はせましかば、行末の御宿世々々は知らず、只今

昔より争ひ給ふ御 中將の嘆した様。三九九頁。

人々皆いどみ、女房達は皆それぞれわが主人なる姫君の勝を新りつつ見てゐる。

かう嬉しき 蔵人少將の心。かうした嬉しき折に出くはしたのやうな氣のするのにも、なさせたい心ではある。ぬか喜びになるかと思つたのである。はかなき心といつたのである。はかなき心。櫻色のあやめも 三九七頁に、一櫻の細長、山吹などの折にあひたる」とあつた。散りなむのちの 古今春上「櫻りなむは深く染めて著む花の散りなむ後の形見に」

はかひあるさまにもてなし給ひてましを」など宜ひ出でて、皆物あはれなり。
 中將など立ち給ひてのち、君たちは、打ちさし給へ。る碁打ち給ふ。昔より争ひ給ふ櫻を賭物にて、「三番に數一つ勝ち給はむ方に花を寄せてむ」と、たはぶれかはし聞え給ふ。暗うなれば、端近うて打ち果て給ふ。御簾まきあげて、人々皆いどみ念じ聞ゆ。折しも例の少將、侍従の君の御曹司に來たりけるを、侍従は兄若連(中將と例)と一膳に外出して御守つたので打ちつれて出で給ひにければ、大方人ずくななるに、廊の戸のあきたるに、少將はやをら。寄りてのぞきけり。かう嬉しき折を見つけたるは、佛などのあらはれ給へらむに、参り。たらむ心地するも、はかなき心になむ。夕暮の霞の紛れは、さやかならねど、じつと見つめて見るとつくんと見れば、櫻色のあやめもそれと見。分きつ。げに散りなむのちの形見にも見まほしく、匂ひ多く見え給ふを、いとど異さまになり給はむ事、わびしく思ひまざる。若き人々

さるべきにこそは、これらも姫君の運命ならう、斯様に生憎な(事)邪悪して下さればと思ふの(に)御言葉であるにづけても長多い。昔の感情からは絶対的に反対されるべき女御からも御催促のあつた事を恐縮するのである。

聞き煩ひ給ひて、少將に泣きつかれて雲居雁から玉登へ哀願の文を返るのである。いと傍聞きこと、姫君を戴きたはなどとお願ひの出来る身分ではないがと、半下の詞、身分で推し量りて、私の心を御推察下さつて、氣の安まるやうにお取計らひ下さい。

院よりわりなく、院から無理にもとの御所望がございましたので。慰め聞えむ、お氣の安まるやうな方法を講ずるのを見て戴くのが外聞も程便でございませう。

さし合せては、二人一緒に(姉君の院と中君を少將へと)片附けてはあまり得意さうでよくなからう。あさへたる「浅し」と同語根の動詞で通用形のみを用ひる。いかならむ折に、よい機会があつたらわが物にしよう。頼みかからず、取付きはもなくなつてしまつた事を。かひなき事も、言うても詮のない様言もいひたくて。さなめりを見て、源の文と見て取つて奪ひ取つた。意ありがほにや、侍従は見せまゐるので、強ひても隠さない。つれなくて、情しむ人の心も願みず、月日は過ぎて春の暮になつてしまつた。恨めしい事だ。人はかうこそ、以下源の文を見人の少將の心。他人はよくもこのなにあせらず、體裁よくしてゐて、思ひが述べられたものだ。わが自分と人わらははれるも、一つは自分がをかし程やきもきしつて、却つて、人には馴れこになつてしまつたのだ。河内本は例語らふ、いつも文の取次を頼む。

しうなむ。同じくは、此頃の程におぼし立ちね」など、いとまめやかに(そのかし)聞え給ふ。さるべきにこそはおはすらめ、いと斯うあやにくに宜ふも、忝し、など思し(立ち)たり。御調度などは、そこらしあかせ給へれば、人々の(御)装束、何くれのはかなき事をぞ急ぎ給ふ。これを聞くに、藏人の少將は死ぬばかり思ひて、母北の方を責め奉れば、聞き煩ひ給ひて、いと傍聞きことにつけて、ほのめかし聞ゆるも、世にかたくなしき闇の迷ひになむ。おぼし知る方もあらば、推し量りて、なほ慰めさせ給へ」など、いとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかな、と打敷き給ひて、(玉登)「いかなる事と思ふ給へ定むべきやうもなきを、院より(いと)わりなく宜はするに、思ひ給へ亂れてなむ。まめやかなる御心ならば、この程をおぼししづめて、慰め聞えむさまをも見給ひてなむ世の聞えもなだらかならむ(さ)」。など申し給ふも、この御参り過ぐして、中の君をとあ

ぼすなるべし。さし合せては、うたてしたりがほならむ、まだ位などもあさへたる程を、(少將)など思すに、男は、更にしか思ひ移るべくもあらず、(源の夕)ほのかに見奉りてのちは、面影に戀しう、いかならむ折にとのみ覺ゆるも、(少將)かう頼みかからずなりぬるを、思ひ歎き給ふこと限りなし。かひなき事もいはむと、(源)例の侍従の曹司に來たれば、源侍従の文を(源)見居給へりける。引き隠すを、さなめりと見て、(少將)うばひ取りつ。事ありがほにやと思ひて、いたうも隠さず。そ(源)こはかとなくて、ただ世を怨めしげにかすめたり。つれなくて過ぐる月日を敷へつ物怨めしき暮の春かな(源)人はかうこそ、そのどやかに、さまよくねたけ(源)なめれ、わがいと人わらははれる心いられを、かたへは目馴れてあなづりそめられにたる(源)と思ふも胸痛ければ、ことに物もいはれで、例語らふ中將のおもとの曹司の方に行くも、例のかひあらしか

女御は聊かなる、もし一寸した
行違があつて女御がおもしろく
なく思召すやうな事がありまし
たら、世間ではそれをひびんで
いらつしやるやうにおもふでせ
う。院の女御は玉愛の異母姉妹
故、今度の姫君とは叔母姉の間
柄である。
二所 中將と辨と。何れも玉愛
の息。
さるは、そんなうるさい話もあ
つたが。

いかてかは、どうしてこんな美
人をただに置けるものぞと顔か
れる。
かの梅が枝に合せ 正月二十日
頃の本。三九三頁。
ただには覚えざりけり 兼は心
を動かさずにはあられなかつ
た。

その年返りて 兼十七。
男踏歌 卷三初巻の一四頁參
照。
かとう 歌頭。踏歌の折の音頭
取で、右の歌頭は右近中將が勤
める。兼は右宮巻に右近中將に
なつた。三五三頁五行。河内本
は兼の意。

この御息所 玉愛の姫君。去年
七月から庭敷はしてあられるが
まだお生みにはならないが、
此處に初めて御息所といふ。
右の大殿 右大臣と致仕大臣の
一族以外には。
うちのお前よりも 人々は主上
のお前よりも院のお前を取かし
く格別に思つて氣をつけてゐる
のだがその中でも。

綿花 踏歌の折には綿で作つた
花を冠にかざす。
竹河 兼馬樂。踏歌の折には竹
河を兼ふ。卷三、一五頁。
過ぎにし夜の 去年正月二十日
夜玉愛方での事。

兼よりもはしたなう あまりあ
かるすぎで顔を見られるから。
いかに見給ふらむと 兼君が自
分を見て何と思はれる事だらう
と思ふと少將は舞踏する氣もど
こへやら、足のふみども夢うつ
つて。

女御は、聊かなる、事のたがひ目ありて、よろしからず思ひ聞
え給はむに、ひがみたるやうになむ世の聞き耳も・侍らむ」な
ど、二所して申し給へば、玉愛かんの君、いと苦しとおぼしぬ。
さるは限りなき御思ひのみ月日に添へてまざる。七月より孕み
給ひにけり。うち惱み給へるさま、御息所の美しさはげに人のさまに聞え煩
はすも、ことわりぞかし。以下地の文いかてかは斯からむ人を、なのめに
見聞き過ぐしてはやまむ、とぞ覺ゆる。冷泉院が御息所の方で明暮御遊びをせさせ給
ひつつ、侍従もけちかう召し入るれば、御ことのねなどは聞
き給ふ。かの「梅が枝」に合せたりし中將のおもとの和琴も、
常に召し出でて弾かせ給へば、聞きあはするにも、ただに
は覺えざりけり。
その年返りて男踏歌せられけり。殿上の若人どものなかに、物
の土手多かる頃ほひなり。そのなかにも、すぐれたるをえらせ
給ひて、この四位の侍従、右のか・とうなり。かの藏人の少將

● 樂人のかずのうちにありけり。十四日の月の・花やかに曇
りなきに、主上のお前より出でて冷泉・院にまゐる。女御もこの御息
所も、冷泉院の御息所うへに御局して見給ふ。上達部親王達・引きつれて參
り給ふ。右の大殿、致仕の大殿・の・族を離れて、きらき
らしう・清げなる人はなき世なりと見ゆ。うちのお前よりも、
この院をほいと恥かしうことに思ひ聞えて、皆人用意を加ふる
なかにも、藏人の少將は、見給ふらむかしと思ひやりて、御息所の美しさは静
心なし。匂ひもなく見苦しき綿花も、それまかす人によつて別の物のやうに見えてかざす人がらに見分かれ
て、御の姿さまも聲もいとをかしくぞありける。「竹河」誦ひて、御階
のもとに踏み寄る程、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出
でられければ、御息所ひがこともしつべくて、涙ぐみ・けり。後の宮
の御方に參れば、踏歌の人々うへもそなたに渡らせ給ひて御覽す。月は夜
ぶかうなるままに、兼よりもはしたなう澄みのほりて、いかに
見給ふらむとのみ覺ゆれば、踏む空もなうただよひありきて、

盃もさして一人をのみをみ 踏歌に
は飯と水とがあつて 少将は盃を
のさされても自分一人をみかけて
ささるやうに思はれてきまり
わさつた。河内本は樂頭。
かとうの詩で、踏歌の折にさす
八句の詩で、句ごと末にさす
萬春樂と唱へる。卷三、七頁。
聖人女房造の實家の人々が
勢も所方に集つてゐるので、
いづれも花やかで何となく
一夜の月影は、昨夜はあまり月
が光るすきで、きまりがわるい
月の光に輝きたりし 蔵人少將
が月の光を浴びたところ、
桂の影に少將の光り輝いたと
ころも、月光の輝きにも恥ぢない
もの、やうであつた。細流抄
「はづる本待にもあり少將は
美男なれば、佳男にもはづる程
も見えざると也。院中にては左程
此影を用ゑ、月と見るが程か
であらう。」
「はづる本待にもあり少將は
美男なれば、佳男にもはづる程
も見えざると也。院中にては左程
此影を用ゑ、月と見るが程か
であらう。」

盃もさして一人をのみをみ咎めらるるは、面目なくなむ。
夜一夜所々にかきありきて、いと惱ましう苦しうて臥したるに、
源侍従を院より召したれば、冷泉院から「あな苦し。暫し休むべきに」と、
むづかりながら参り給へり。今日の内裏の所々の様子などを院が遣にお尋ねになる。
「どきはうち過ぐしたる人の先々するわざを、若いあなたに遣はれたる程、
心にくかりけり」とて、うつくしと思しためり。「ばんずんらく」
を御口ずさびにし給ひつつ、御息所の御方に渡らせ給へれば、
御供に参り給ふ。物見に参りたる里人多くて、例よりも花やか
に、けはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て、聲聞き知りたる
人々に、物など宣ふ。「一夜の月影は、はしたなかりしわざか
な。蔵人の少將の月の光に輝きたりし気色も、桂の影に恥づる
にはあらずやありけむ。雲の上近くては、さしも見えざりき」
など語り給へば、人々あはれと聞くもあり。「女房」聞ほあやな
きを、月ばえ、今すてし心殊なりと。「聞えし」などすかして、

竹河の歌 玉葉の方で竹河を
おぼしめし、つひに「あつたが、
たが、なる事は、いさか、いさか、
たが、なる事は、いさか、いさか、

渡れての、あの頃は行末に望み
もあつたが、その竹河で、世の愛が
しみんと分つた。「流れ」は
河の流語。

うち出て過ぐす 長居して居て
言はんでもよい事まで言ひ過ぎ
ては困る。

踏歌のあしたに 初音巻一七頁
には、後宴の折、女樂を催す爲に
樂器を用意した事だけ記して、
折女樂が催された事は明かであ
る。

内より

竹河のそのよの事は思ひいづや憊ぶ許りの節はな付れど
と、はかなき事なれど、涙ぐまるるも、けにいと後くは覺え
ぬ事なりけりと、みづから思ひ知らる。
流れての頼め盡しき竹河に世は憂きものと思ひ知りにき
ものあはれなる気色を、人々をかしがらる。さるは、あり立ちて
人のやうにもわび給はざりしかど、人さまのさすがに心苦しう
見ゆるなり。うち出で過ぐす事もこそ侍れ。あなかしこ」と
て立つ程に、「こなたに」と、召しいづれば、はしたなき心地す
れど参り給ふ。五月十五日故六條の院の踏歌のあしたに、女がたにて遊
びせられける、いと面白かりきと右のおとどの語られし。何事
もかのわたりのさしつぎなるべき人、難くなりける世なりや。
いと物の上手なる女さへ多く集まりて、いかにあはれなき事も
かしかりけむ」などおぼしやうて、御ことども調へさせ給ひて、

久しうなりける。親が子に
つた。か昔の例を勤へた上
この君の。玉葉の侍任が長い間
を離れなかつたのも、中君が見
られる。因縁であつたとも見
新くて心やすくて。玉葉はかう
して中君が心よく宮仕の出来る
やうにと思召すにつけ、蔵人少
將の爲に世北の方があざ／＼人少
もで来られた時、中君を許して
たのに、宮仕に出たと聞きては、
何と思はれもせう。

うちより。主上から中君を侍
にとの御言がございますので、
姉を院にあげた上には、又妹を侍
として宮仕させるとして、世間
仕を好むものとして、世間の
えもどございませう。なやんで
るものでございませう。
うち御氣色は。主上の逆鱗は
御尤もと存じます。
おほやけごと。女官として
も御奉公をなさらないと、
は宜しくない事です。女御に
参られなかつたが、せめて女官
になりなすもの意。

おとどおはせましかば。黒黒存
主上は誰も中君をおさへつけ
ようともなさるまいなど。

かた／＼に。宮仕に出た二人の
人達の世話を焼ける間は、おつ
とめをなさるにもお心が落着か
ないでせう。

うちには。玉葉が禁中に居る侍
の所へ。
さるべき折も。何か用事のある
時でも院には参らなかつた。
古へを思ひ出して。昔自分が
院の思召に背いて。駿馬の妻にな
つた事を思ひ出して。それが勿體
なきに、そのお詫びの積りで、
昔の反對をも知らないふりして、
院君を宮仕に差上げて。其上自
分までが、假初にも若々しい。誠
に世間に願向けもならず。見苦し
い事だらう。
さる事によりと。言つてさう
した事(院の御恩)を避ける
息所にも打明けられないので。河

心をおぼして、久しうなりける。昔の例など引きいでて、その
事かなひ。(中)ぬ。この君の御宿世にて、年頃申し給ひしは難き
なりけりと見えたり。斯くて、心やすくて。内裏住もし給へかし
とおぼすにも、いとほしう、少將の事を、母北の方のわざと宣
ひしものを、頼め聞えしやうにほめかし聞えしも、いかに思
ひ給ふらむ、とおぼしあつかふ。辨の君して、心うづくしきや
うに、おとどに聞え給ふ。馬うちより斯かる御言のあれば、さ
ま／＼にあながちなるまじらひの好みと、世の聞き耳もひかが
と思し給へてなむ煩ひぬる」と聞え給へば、馬うちの御氣色は、
おぼし答ひるも、ことわりになむ承る。おほやけごとにつけて
も、宮仕し給はぬは、さるまじきわざになむ。はや思ひ立つべ
きになむ。(中)と聞え給へり。又この度は、中宮の御氣色取りて
を参り給ふ。おとどおはせましかば。(中)と聞え給へり。おほし消ち
給はざらまし、など、おはれなる事どもをなむ。姉君は、かた

ちなど、名高うをかしげなりと聞召しおきたりけるを、引きた
かへ給へるを、なま心ゆかぬやうなれど、これもいとらう／＼
じく、心にくくもてなしてさぶらひ給ふ。
さきのかんの君、かたちをかへてむと思し立つを、かた／＼
にあつかひ聞え給ふ程に、行ひも心あわただしうこそ思されめ。
今すこしいづ方も心のどかに見奉りなし給ひて、もどかしき所
なく、ひたみちに勤め給へ」と君たちの申し給へば、おぼしと
どとほりて、うちには時々忍びて参り給ふ折もあり。院には、
煩はしき御心ばへの猶、絶えねば、さるべき折、も更に参り給
はず。古へを思ひ出でしが、さすがに忝うおぼえしかしこまり
に、人の皆ゆるさぬ事に思へりしをも、知らずが候に思ひて参
らせ奉りて、みづからさへ、たはぶれにても、若々しきことの
世に聞えたらむこそ、いとまばゆく見苦しかるべけれ、と思せ
ど、さる思によりと、はた御息所にもあらはし聞え給はねば、

3/0
138

終

